九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国における経済史研究の現状と課題

李, 暁
中国政法大学商学院 : 教授

張, 暁紅
九州大学大学院経済学研究院 : 助教

https://doi.org/10.15017/15771

出版情報：經濟學研究. 74 (5/6), pp.117-128, 2008-04-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

中国における経済史研究の現状と課題

李　　暁
張　　暁　紅（翻訳）

はじめに

中国の経済史研究は約百年の歴史を持っている。現在では、時代の変化と共に、多様な理論と方法をいかし、現代化などの課題に取り組んでいる。

本稿は中国における経済史研究の現状、中心的なテーマ、および今後の課題について概括的に紹介する。

第一節　中国の経済史研究の基本的状況

1．中国における経済史研究の三つの段階

(1)　第一段階（1900－1949年）

中国の歴史家は、昔から経済史を研究する伝統を持っている。司馬遷の『史記』、班固の『漢書』をはじめとする歴代史書の「食貨志」の中に国家が経済を管理する際の規定、制度、および経済的な主張を記載している。もちろん、これらの記述は現代的意味での経済史学とは言い難いものである。

西洋の近代的歴史学、経済学、社会学などの社会科学理論の伝来とともに、近代的経済史が中国に伝わってきた。これが中国における科学的研究としての経済史の発端であった。

20世紀はじめ、梁啓超は「史学革命」を呼びかけ、西洋の経済理論を用いて中国の経済現象と経済思想を研究するよう試みた[1)]。さらに、『中国国債史』（1904年）やマルサスの人口理論を応用した『中国歴史上人口統計』などの著作を出版した。これをもって中国での経済史学研究が本格的に開始された。

1930年代、中国の学者は社会の性質、社会発展の方向などについて大規模な論争を展開し、中国経済史学はそれまでにない発展期を迎えた。この発展はマルクス主義と深くかかわっていた。

1927年、中国の大革命[2)]が失敗したあと、人々は「中国はどこに向かうのか」という疑問を持ち、

1）たとえば、梁啓超は1901年『清議報』で「中国史叙論」、1902年『新民叢報』で「新史学」を発表した。なお、両論文は『飲氷室合集・文集』第3冊、第4冊（中華書局、1932年）に収録されている。

2）蔣介石を中心とした国民党右派は「4・12政変」を引き起こし、数多くの共産党員を惨殺した。これによって国共合作が破裂し、国民革命は失敗に終わった。

これは直ちに解決しなければならない問題へと成長した。「生産力は生産関係を規定し、経済基礎は上部構造を規定する」というマルクス主義の理論は、人々に社会経済の形態と、経済の発展状況、およびその歴史に注目させた。この時期、この視点からの著作が数多く発表された。

当時、主に三つの研究グループがもっとも有名であった。

第一に、郭沫若を代表とするマルクス主義的研究者、経済史研究者であり、代表作に『中国古代社会研究』[3]などがある。

第二に、中央研究院社会科学研究所のグループである。研究所は1932年に『中国近代経済史経済集刊』（のち『中国社会経済史研究集刊』）を創刊し、中国で初めて「経済史」という言葉を学術雑誌名に用いた。

第三に、陶希聖を中心としたグループがある。陶は隔週刊誌『食貨』で論陣を張った。統計によれば、この雑誌で発表された論文の内訳は、生産力研究文献18%、生産関係研究文献57%であった[4]。

後者の二つのグループは、研究方法、政治的・学問的な考え方に相違点[5]があるとはいえ、史的唯物論（唯物史観）の理論に基づいた分析を行う点においては共通性を持っている。

(2) 第二段階（1949－1966年）

中華人民共和国建国後、マルクス主義は国家における政治、経済、文化的な指導思想として認められた。当時の政治的な必要に応じて、社会経済史の研究も盛んに行われた。

当時の史学研究の焦点は主に以下の五つの領域に集中している。①奴隷制度と封建制度の歴史的時期区分について、②土地所有権問題について、③資本主義の萌芽について、④農民戦争について、⑤封建社会の長期継続（いわゆる漢民族の形成）について、である。この五つの領域は「五朵金花」（「五つの金の花」）と呼ばれ、そのうち、四つは社会経済史の分野に属し、あるいは社会経済史と密接な関係を有していた。

また研究方法の違いから、1940年代に二つの流派が形成された。一つは中国社会科学院を代表とする政治経済学理論と方法の活用を重視する学派であり[6]、もう一つは傅衣凌を中心とした民間の契約文書、石碑に彫り付けられた文字や図画、民俗などの資料を重視し、地域社会のミクロな状況と全国のマクロな状況とを結びつけて研究を行う学派である[7]。この二つの学派はそれぞれの特徴を持っているが、お互いに尊重し、学び合い、融合している。

この時期数多くの研究成果があったが、多くのものはやはり政治的な要請に応じたものであるとい

3）郭沫若『中国古代社会研究』中亜書局、1930年。本書はマルクス経済理論を用いて中国の「殷」と「周」の両時代の奴隷制度を分析した。

4）李根蟠「中国経済史学形成和発展三題」『経済・社会史：歴史研究的新方向』商務印書館、2002年。

5）たとえば、中国社会科学研究院の研究者らは比較的に進歩的な歴史観を持ち、資料収集・整理および実証研究を重視する。一方、陶希聖らは社会形態を重視する。

6）厳中平編『中国近代経済史統計資料選輯』科学出版社、1955年、許滌新・呉承明編『中国資本主義発展史』第1巻、人民出版社、1985年、厳中平編『中国近代経済史』人民出版社、1989年。

7）傅衣凌『福建佃農経済史叢考』福建協和大学、1944年、同『明清時代商人及商業資本』人民出版社、1955年、同『明清農村社会経済』三聯書店、1961年。

う限界を持っていた。たとえば、社会主義体制の実現が必然的なものであることを証明するために歴史的時期区分を行い、五つの生産方式がすべて中国で形成されたことが強調された。毛沢東の「外国資本主義の影響がなくても中国には資本主義が訪れるであろう」[8]という判断を証明するため、資本主義的萌芽の研究が行われた。また、封建的地主の搾取を指摘し、土地改革に理論的な基礎を提供するために、土地制度の研究が展開された。こういった限界性は、社会経済史研究の視野を狭くし、研究の焦点を階級関係に集中させることになり、社会経済構造、社会経済生活などのような豊かな研究テーマを見逃してしまうことになったといえるだろう。

(3) 第三段階（1978年ー現在）

「文化大革命」の十年、経済史研究は停滞した。文革が終わって、1978年からの十数年間、改革開放政策が実施され、経済建設は国の中心的な事業として位置づけられた。経済史研究もいままでにないほど重視されるようになり、学術思想も空前に発展した。

中国社会科学院歴史事務室編纂の『中国社会経済史論著目録』[9]には、1900－1984年における中国大陸と香港、台湾の中国経済史に関する著作と、論文２万件あまりが収録されている。1997年出版の中国社会科学院経済所編『1986－1995年中国経済史書目と論文索引』[10]には、大陸の分だけで２万件あまりの論文が収録されている。つまり、論文数で比較すれば、この十数年の成果は1984年までの85年間の成果の合計に相当する。1995年以降の研究成果についてはまだ集計されていない。

この時期における経済史研究の主な特徴は、以下のようなものである。

① 中心的なテーマの変化

研究の中心的なテーマは、階級関係から経済関係へと変化した。これに関連するさまざまな問題について、活発な議論が展開された。たとえば、中国封建社会の長期継続、中国封建社会の経済構造、小農経済、商品経済と市場経済、中国の近代化過程、生産力の発展、人口圧力問題、環境と生態均衡の問題、経済問題に対する国家関与、儒学思想が経済発展に果たした役割などの議論がある[11]。これらの問題はすべて、中国の経済史研究者の中国経済の特徴、および近代化の実現プロセスに対する再認識によるものである。

1993年から毎年、中国社会科学院経済部門、歴史部門、近代史部門は、北京、および北京付近のい

8）毛沢東『中国革命和中国共産党』（『毛沢東選集』第２巻）人民出版社、1991年、626頁。

9）中国社会科学院歴史事務室編纂『中国社会経済史論著目録』斎魯書社、1988年。

10）中国社会科学院経済所編『1986－1995年中国経済史書目と論文索引』、同『中国経済史研究』（1996－1997年聯合増刊号）、1997年。

11）代表的な研究成果は以下のようなものが挙げられる。田昌五・漆侠編『中国封建経済史』斉魯書社、1996年、于琨奇『秦漢小農与小農経済』黄山書社、1991年、史志宏『清代前期的小農経済』中国社会科学出版社、1995年、陳春声『市場机制与社会変遷』中山大学出版社、1992年、鄭学檬編『中国賦役制度史』厦門大学出版社、1994年、孟繁清編『専制主義与中国封建経済』河北教育出版社、1996年、葛剣雄『中国人口発展史』福建人民出版社、1990年、呉承明『中国資本主義与国内市場』中国社会科学出版社、1985年、同『市場・近代化・経済史論』雲南大学出版社、1996年、汪敬虞編『中国近代経済史』人民出版社、2000年。

くつかの大学と「伝統経済と近代化」をテーマとする討論会を開催している[12)]。

② 研究領域の拡大

これまでの経済史研究は、主に生産関係を重視し、生産力、流通、消費などの領域にあまり関心を向けてこなかった。現在、経済史の研究範囲はすでに社会的再生産における生産、流通、分配、消費などの各部分を含んでおり、研究課題も細分化と交流融合という二つの傾向を見せている。

細分化とは、テーマがますます細かくなりつつあるという傾向である。地域、部門、テーマごとに研究を行い、中国全体、経済全般を扱うといった漠然としたテーマはあまり取り扱われなくなってきている。中国は歴史が長く、地域も広く、そして資料も豊富であるため、漠然とした大きなテーマの研究では深くまで掘り下げることができない。二つ目の交流融合とは、ますます多くの研究が、専門の枠を越えて横断的な研究に発展したことを指す。こうした研究は、経済と社会、政治、文化、自然との総合関係を重視し、そのなかで経済発展を遂げたことを強調する。たとえば、多くの研究テーマは、経済史を社会史、政治史、文化史、思想史、人口史、家庭史、女性史、環境史と関連づけて論じている[13)]。

③ 研究方法の多様化

ほとんどの中国の経済史研究者は、依然として史的唯物論（唯物史観）の理論を重視する。一方、欧米の経済学の理論と方法を積極的に応用する研究者もいる。彼らは、新制度派経済学、計量経済学、開発経済学、地域経済学、社会学、人類学、法学、地理学、生態学、考古学、人口学などの理論に基づいて分析を行う。分析手段は主に、実証分析、計量分析、構造分析などが広く使われている。

2．最近十年間の状況

1990年代半ば以来、中国の経済史研究は厳しい状況に直面するようになった。マルクス主義理論の地盤沈下、新古典派経済学の大規模な導入に伴って、大学から研究機関まで、応用性の強い専門分野がますます重視され、経済史研究は実利の伴わないものとしてみられるようになった。そのため、経済史研究への研究資金の配分が少なくなり、研究成果も停滞し始めた。経済史専攻大学院生・学生は就職難に直面し、大学の経済学部や大学院の経済史関連の講義は削減されるようになった。その結果、多くの経済史研究者は応用型研究に研究課題を変更したり、社会史、文化史、政治史などの領域に展開を求めたりして、研究者数は大幅に減少した。

現在、全国規模の経済史学術団体として中国経済史学会がある。1986年に成立し、2002年に国際経済史学会に加入した。この組織の下に「中国古代経済史」、「中国近代経済史」、「中国現代経済史」、「外国経済史」の四つの専門委員会がある。会員はあわせて400人あまりであり、全国規模の大会は二年に一度開催される。不定期に特定のテーマをとりあげて学会を開くこともある。

12）たとえば、2004年12月7日に首都師範大學にて「中国伝統経済再評価」第四回学術討論会が開かれた。経済発展の基準、労働生産率と商品経済問題、中国と欧米伝統経済および近代経済への構造変化にみられる特徴などの問題について熱い議論が展開された。

13）李根蟠「中国経済史学百年歴程与走向」中国社会科学院経済研究所『経済学動態』2000年第5期。

第二節　中国の経済史研究の課題について

中国の経済史研究は通常、古代から現代までを主に三つの段階にわけて議論を行う。古代（1840年まで）、近代（1840－1949年）、現代（1949年以降）である。このような分類は、主に研究対象によって決まる。中国経済史の各段階は、それぞれの特徴を強く持っており、しかも各段階の資料は豊富であり、問題も多く存在しているため、時期区分をしてよりよい研究成果を求めることができる。このような段階区分は合理的である。しかし、後で触れるように、問題も存在する。

2005年に発表された経済史関係論文の統計によると、1000本あまりの論文が公表され、そのうち、古代は500本で半分を占めている。これは宋－清時代の研究が多く300本あまりで、古代史の3/5を占めている[14]。近代、現代は各200本ずつである。つまり、中国経済史研究者の約半数は、古代経済史研究領域に集中している。各段階の課題を詳細に紹介することはできないが、中国経済史学会で多くの人の関心を集めている、現在の研究の特徴を反映するいくつかの課題を取り上げて紹介しよう。

1．環境史の視点からの経済史研究

近年、工業化を中心とした現代化が進み、社会は大きな発展を遂げた反面、さまざまな環境問題と社会問題にも直面するようになった。20世紀半ば以降、環境保護運動の高揚に伴い、環境史という学問が誕生した。

1990年代中期から、中国でも環境史分野の研究が現れ始めた。一部の経済史研究者はこの分野に身を投じ、学術研究会を開き、多くの論文を発表している。『中国経済史上的天人関係』[15]はその代表的な成果である。

中国の学者が環境史の視点から経済史を考察することは、主に現代における生態の理念から経済史を見直すことを意味する。現代の生態理念によれば、人類は地球生態圏の一員であるため、その経済活動は生物圏の生態システムの中で行われる。したがって、人類の経済システムは生物圏生態システムの中のサブシステムであり、経済システムはあくまでも生態システムを基礎とするものであると考える。自然は物質的な要素として経済活動に参加するだけでなく、人類と一緒に経済活動を完成する。このような考え方はすでに中国の研究者の共通認識となっている。

このような研究は私たちの認識を豊かにしてくれる。たとえば、生産力についての研究範囲を広げることに貢献している。過去の経済史研究は生産力を議論する際に、主に生産手段、生産技術と労働状況を重視していた。現在では、「人－社会－自然」という複合的な生態システムの角度から考察されるようになり、生産力の研究内容は豊かになった。そして生産力は社会的な生産力だけではなく、自然生産力、生態生産力あるいは環境生産力も含まれており、現代の研究方法は社会生産力と自然生産力の統一を実現した。

14）董志凱『経済史学科発展状況報告－2006年７月12日在中国経済史学会2006年会（南昌）的工作報告』（未公開出版資料）、董志凱は現中国経済史学会長を務める。

15）李根蟠編『中国経済史上的天人関係』中国農業出版社、2002年。

また、環境史の視点の導入により、経済発展の評価体系を再建することができる。いままで歴史上の経済発展を評価する際には、主に国民総生産、労働生産性に着目していた。環境史と経済史の融合研究では、これらの指標以外に、経済発展と環境変遷の関係も分析すべき課題であり、資源利用の程度だけではなく、資源消耗と資源利用状況の合理性にも注視すべきであることを示唆している。国民総生産、労働生産性、環境と資源の結合を含めた研究こそ、経済発展の実際の意義を評価できるということである。

農業史、人口史を含めた環境史の研究は、環境史的視点から経済史研究を行う際の重点的な研究方向の一つである。たとえば、人口問題は中国の重要な課題の一つである。中国の人口はどうしてこんなに多いのか？要因はたくさんある。最も根本的な要因は、昔から中国は農業が発達し、この程度の人口を養うのに問題がなかったからである。中国の伝統的農業の特徴は、栽培を中心とし、「精耕細作」（丁寧に耕作）することである。中国では、戦国時代からこのような特徴が目立つようになった[16]。どうしてこの時代にヨーロッパのような農牧混合型の構造形態に発展しなかったのかという問題について、環境史の角度から、考古学、環境考古学、気象史学などの研究も含め、総合的に考察した結果、以下の結論を得た。旱魃、黄河中下流地域のアルカリ問題などの環境変化により、古代の人々は丁寧に耕作することによって食糧の単位あたり生産額をあげるという選択肢を選ばなければならなかったのである。中国古代農業の発展は、ほとんどが「精耕細作」という生産方式の発展・拡大である。ロジックを単純化すれば「環境変化＋地域的人口増加→「精耕細作」→人口の再増加」と表せる。このような視点からの研究は、単純に生産力発展、生産技術水準の向上などの角度から行われた研究の不足を補い、中国の農業史と人口状況に新たな合理的解釈を与えた[17]。これは、中国経済史研究が現在さまざまな学問と融合していることを反映している事例である。

2．現代化とそれにかかわる研究について

1980年代以来、現代化の実現は中国経済発展の最も重要な任務であると位置づけられた。この影響を受けて、古代、近代、現代を問わず、各領域の研究はすべてこれを課題として取り組み、現代化は中国経済史研究の中心的なテーマとなった。

現代化研究の一つの大きな特徴は、現代化を市場化、資本主義化、工業化と関連付け、経済発展、制度変化、中国経済と世界経済などの視点から分析を展開することである。今日まで、議論の焦点としては、伝統的経済発展水準の評価、伝統的経済と現代化との関係、在来要素と外来要素との関係、1949年までの外資の役割と地位、工業化過程、新中国の五カ年計画、中国経済と世界経済との関係、国家・文化などの要因と現代化との関係、企業発展史などがある。

16）戦国時代の「精耕細作」農業に関する具体的な論述は、万国鼎「戦国時期農業的飛躍発展及其動因和影響」（『万国鼎文集』中国農業科技出版社、2005年）を参照されたい。

17）李根蟠「環境史視野与経済史研究」南開大学『南開学報』2006年第2期。同「精耕細作、天人関係和農業現代化」中国農業博物館『古今農業』2004年第3期。

(1) 伝統経済の再評価、伝統経済と現代化との関係について

これまで、欧米経済史研究者は、明清時代の中国経済は停滞に陥り、発展から取り残され、閉鎖的なものだと認識してきた。しかし、1990年代初頭以来、欧米の一部の研究者、とりわけアメリカの「カリフォルニア学派」は、中国の明清時代の経済水準に対して新たな考え方を提起した[18]。彼らは、18世紀末までの江南地域とイングランドとを比べると、江南地域の経済状況は決して遅れておらず、その後イギリスが大きく発展したのは、炭鉱の分布が経済中心地帯に近く、原料調達地でもあり市場でもある植民地を有していたことなど、中国にはなかった発展要因がそろっていたからだと主張している。

このような考え方は、中国では大きな反響を及ぼした。活発な議論を経て、西洋の学者のこうした考え方に同意する人も現れたが、過半の人はやはり清朝期経済の発展を認めると同時に、ヨーロッパとの間に質的な格差があることを強調した[19]。

多くの学者は、中国の資本主義と工業化過程は、中国固有の伝統的な手工業の発展から生まれたものではなく、外来的な要素によるものであると考える。最初の一連の近代企業は外国資本によって開設されたもので、中国人民営企業は主に一部分の、手工業生産とまったく関係ない官僚、地主と商人たちが、西洋のやり方を学んで創立した新式工業である。したがって、中国における資本主義の形成は、伝統的な封建経済の内部から生まれた新しい力が古い生産関係を突き破ってできたものではなく、外国資本主義勢力の衝撃を受けてできたものであり、中国の伝統的な経済発展と断絶している。中国の近代以来の市場経済の発展も外国資本が中国を世界市場に牽引したことによるものであると考えられ、たとえば、港や交通線路附近の市場化は他の地域より大きく進んでいる[20]。

(2) 中国の経済発展および発展・停滞に関する議論

先に述べた議論と関連しているが、中国の近代経済の発展傾向とその中心を探るとき、現在ではほとんど侵略と抵抗という民族対立、階級対立といった視点を切り捨て、主に発展・停滞の議論を中心に据えてきた。

外国資本が中国の工業化と市場化を促進したことを認めながら、全体として外国資本主義と中国官僚資本主義が優位にあるため、民族資本主義は不十分な発展しか遂げてこなかったことを主張する[21]。1950年代初め、中国の労働と生産は依然として伝統農業と手工業が80％以上を占めており、工業化と

---

18) R.Bin, Wong. *China Transformed: Historical Change and the Limits of European Experience.* Cornell university Press. 1997. Andre, Gunder, rank. *ReOrient: The Global Economy in the Asian Age.* University of California. 1998. Press. Kenneth, Pomeranz. *The Great Divergence: Enrope, China, and the Making of the Modern World Economy.* Princeton University Press. .2000
そのほか、浜下武志『中国近代経済史研究：清末海関財政と開港場市場圏』東京大学東洋文化研究所報告、1989年。

19) 中国社会科学院経済研究所『中国経済史研究』2003年第1期に所収された「中国伝統経済再評価」に関する論文を参照されたい。

20) 明根「中国近代経済史研究総述（1977－1996）」中国社会科学院経済研究所『中国経済史研究』（1996－1997年聯合増刊号）、1997年。

21) 汪敬虞『中国資本主義的発展和不発展』中国財政経済出版社、2000年。

民族資本主義は停滞していた。

外国資本主義の優位と独占的な地位は、彼らの技術と資本のみによって確保できたものではない。関税主導権と価格主導権を握り、中国封建政治勢力との切っても切れない「友好関係」によるものでもあった。これが中国の半封建・半植民地的な社会条件である[22)]。

たとえば、杜恂誠の研究によれば、近代市場における日系企業の独占的な地位は主に次の三つ面において現れている。一つ目は日本資本が直接中国企業を圧迫し、それを買収した。綿紡績業がこれである。二つ目は、中国の鉄道、炭鉱採掘権を獲得したことが中国資本主義の潜在的な発展可能性を抑制した。三つ目は直接中国の民族資本主義の発展を抑制したとはいえないが、全体的に、そして戦略的に中国の民族利益と対立するものを発展させた。重工業がそれである[23)]。

中国の停滞は国際収支からみると、1895－1936年において、貿易も資本収支も赤字がますます大きくなり、巨額の赤字は主に華僑の送金と、外国人の中国での支出によって補うまでに深刻な状況に陥っていた[24)]。

(3) 工業化および計画経済、市場経済に関する議論

中国の大規模工業化は、実質的に1953年から始まった。第一次五カ年計画はソ連の援助を受けた「156項目」を中心としていた。

中国は大規模工業化政策で重工業を優先すると決め、ソ連に学んで計画経済体制をとった。これはなぜであろうか。

長年の議論を経て、現在主流となっている見方は次のようなものである。そもそもの原因は、朝鮮戦争とソ連への一辺倒である。その影響を受けて、中国は西側諸国との関係が悪化し、軽工業を発展させる国際市場環境を失った。また中国の新政権は軍事的な脅威を受けていたため、重工業を発展させ、独自の経済体系を作り出すことが急務となった。その結果、ソ連の重工業を優先的に発展させたという経験が、中国にとって格好の良いモデルとなったのであった。

しかし、資本不足、技術遅滞の状況下で、重工業建設のコストを下げるため、国家は統制力を生かし、人為的に為替、貯蓄などの資本、労働力、原料などの価格を操作した。目的を達成するために、国は経済に対する統制力を強め、国によって計画的に資源を分配することを決めた。そのロジックは「重工業優先→コスト削減→各経済部門の各レベルの政府への所属→行政命令にしたがってた資源配分」というものである。

このような工業化過程は、明らかに中国の労働力資源が豊富であるという比較優位から背離したものであった。

1979年以来の中国経済の急成長は、市場化改革と国際市場参入によって比較優位を得た成果であ

22) 汪敬虞「中国経済史中心線索問題再思考」中国社会科学院経済研究所『中国経済史研究』1990年第2期。
23) 杜恂誠『日本在旧中国的投資』上海社会科学院出版社、1988年。
24) 陳争平『1895－1963年中国国際収支研究』中国社会科学出版社、1996年。

る[25]。

(4) 企業史の研究について

企業史研究は、中国では新しい学問であるといえよう。1950－60年代、一部の経済史研究部門は、大型企業の資料や商工業の契約文書、および関係者へのインタビューを計画的に発掘・整理しはじめた。「文革」期に一旦途切れたが、80年代にはその成果がつぎつぎと完成した。企業、産業、商工団体および人物の歴史、資料集が続々と出版され、50－60種類に達した。これらの成果は後の企業史研究の基礎を固めた。1990年代、企業史研究は企業管理学における資本組織、集団化、市場販売、価格政策および経営戦略などの各面において発展しはじめた。近年、企業史の研究は新制度学派の理論と経済史論説の影響を受けて、企業の組織と経営にまで広げられている[26]。

これらの研究の特徴は、各種所有制度の下での企業発展、産業発展、ミクロ企業制度などを重視することにある。しかし、経営史という角度からの研究はまだ少ないといわざるをえない。

(5) 国家および経済発展に関する研究

国家あるいは政府は、社会経済活動に大きな影響を与えている。近年、中国の研究者は国家と市場発展との関係、歴史上の国有経済、近代企業における国有資本と官僚資本などの問題に特に関心を持っている。

現在、中国は経済制度の転換に直面し、国の役割は大きく注目されている。国有企業改革における資産流失、国有企業による独占、政府関係者と企業経営者が特権を利用して個人の利益を求めるなどの問題は、人々の関心を集めており、こういった研究も重要視されるようになってきている。

3．経済史研究資料の調査と整理

資料の整理と編集は経済史研究の重要な課題である。近年、出版および編集された大型資料書籍は、以下のようなものがある。

満鉄資料：

(1) 満鉄資料編輯出版委員会『満鉄原編目録数拠庫』(満鉄編著目録集)、未公開出版資料。
満鉄大連図書館と満鉄調査部の所蔵書目を主として、約30万件が収録されている。

(2) 満鉄資料編輯出版委員会『中国館蔵満鉄資料数拠庫』(中国各図書館・档案館所蔵満鉄資料集)、未公開出版資料。

---

25) 林毅夫編著『中国的奇跡：発展戦略与経済改革』上海人民出版社、1999年。

26) 呉承明『中国現代化課程中的企業発展・序』福建人民出版社、2005年。最近の代表的な研究成果は鄭学檬・呉承明・姜泰新・韓岫嵐等編『中国企業史（古代、近代、現代巻)』企業管理出版社、2003年、張忠民・陸興隆編『企業発展中的制度変遷』上海社会科学院出版社、2003年、劉蘭兮編『中国現代化過程中的企業発展』福建人民出版社、2005年などである。

約35万件が記録されている。

(3) 満鉄資料編輯出版委員会『中国館蔵満鉄資料聯合目録』(中国各図書館・档案館所蔵満鉄資料総合目録)(30巻)東方出版中心、2007年。

民国資料：

中国第二歴史档案館編『中華民国档案資料彙編』江蘇古籍出版社、1991年。

中華人民共和国資料：

中国社会科学院・中央档案館編『中華人民共和国経済档案資料選編』中国出版社、2000年。1949-1952年12巻、1953-1957年9巻。

企業史資料：

上海社会科学院経済研究所、中国企業史資料研究センター所蔵資料。

第三節　中国の経済史研究における課題と展望

現在一部の領域においてすでに詳細かつ綿密な段階に入ってきたが、日本、欧米と比べ、中国経済史の研究は全体的にみるといまだ不十分である。中国の経済史研究者はつねに自らの研究方法を反省し、改善していく道を探っている。管見した限りでは、現在、中国の経済史分析における課題と、今後改善できると思われる点は、主に次のようなものが挙げられる。

1．連続性を重視した研究へ

社会経済の歴史の発展は、本来連続的なものである。経済史研究において、各時代の特徴に基づき段階区分をすることは客観性と合理性を持っているが、歴史現象の内在的な関連を切断してしまう恐れがある。したがって、段階区分は相対的に行われることが妥当であり、それを絶対化し、各段階、時代の間に越えられない溝を作るべきではない。

たとえば、小農経済および家族経営は、古代社会、近代社会において主導的な地位を占めており、今日にいたっても、依然として中国農業経済の主要な経営形態である。企業の家族経営も、顕著な歴史的連続性を持っている。これらの現象を見るとき、時代区分を重視しすぎると、一貫したものがみえなくなり、その本質的な特徴を見失う可能性がある。

そこで、各時代の歴史研究を行う際に、研究対象によっては時代区分を乗り越えた連続性を重視したものが、これからの一つの重要な研究傾向となるであろう。その際、文献資料と現地調査が必要である。

1930年代から、中央研究院社会科学研究所、北平社会調査所の陳翰笙、陶孟和、汤象龍などの研究者は無錫、保定等の地域で農村経済調査を始めた。現在、中国社会科学経済研究所は、これらの両地域で調査を継続している。これは現在において戸と村を単位として、70年間継続されてきた唯一の調査である。そこで得られた資料は、中国農村経済の変遷を研究する際の貴重な資料になるであろう。当研究所の研究者は、これまでの四回の調査結果を踏まえ、第五回目の調査を始め、さらに調査資料

を整理、出版した[27]。これらの調査研究が、中国の都市と農村の経済的な変遷と現代化の特徴を明らかにしてくれるものと信じている。

日本にも時間的なスパンを長くし、歴史と現実の関連性を重視し、現地調査を大切にする研究者は数多くいる。中国の研究者はこれを学ぶべきである。

2．改革開放経済史に関する研究

現在、中国経済史の成果の過半は古代史領域に集中しており、1949年以降の研究は少ない。なかでも、1970年代以降の改革開放経済史に関する研究はとりわけ少ない。このような状況をもたらした要因は、主として改革開放はまだ完成しておらず、毎年新しい変化が続出しつつあるため、多くの問題がまだはっきりと定義しにくいからである。と同時に、中国の経済史研究者が、意識的にこのテーマを避けていることも要因の一つである。彼らは改革開放の問題は経済学、政策の問題だと認識している。

改革開放は今日までにすでに30年の歴史を持っている。統計資料も豊富で完備しており、統計基準も世界の水準に近い。しかも、研究者たちが身をもって体験したことであるため、より正確に認識することができる、などの良い研究条件が揃っている。

中国経済の急成長に伴って、現在日本の大学では『中国経済論』の講義を開設し、教科書や研究著作も続出している[28]。これらの著作のほとんどは、経済史研究にも取り組んでいる。

これと比べると、中国はこの面における研究が立ち遅れている。現在、中国では現状分析の経済研究者で「貧史症」にかかっている者が少なくないといわれる。つまり、これらの研究者は新古典派経済学の影響を受け、経済史の知識が不足しており、歴史的な観点から現実問題を分析することができないのである。また、経済史を研究しているものは「貧今症」患者が多いといわれる。すなわち、現状、現実的な経済問題に関心がなく、経済史研究と現実問題との関連性を重視しないという病状である。こういったことからも、今後、改革開放経済史の研究はひとつの重要な研究領域になると予測できよう。

3．中国の経営史に関する研究

21世紀初頭から、東京大学社会科学研究所と経済学部を中心とし、他の大学も参加した研究グループが、中国近代五大新興工業に関する研究を発足させた。五大新興工業とは化学、電力、鉄鋼、石炭、機械製造である。研究方法の大きな特徴のひとつは、経営史の角度から切り出し、各産業の出現から今日に至るまでの歴史的な発展過程に対して、その形成、産業組織の変化状況、技術変革と継承、国

27）王宏宇「扎実推進中国経済史学科建設」中国社会科学院『中国社会科学院報』、2007年１月11日。

28）たとえば、中津和津次『中国経済発展論』有斐閣、1999年、同『経済発展と体制移行』（『シリーズ現代中国経済１』）名古屋大学出版会、2002年、加藤弘之『中国の経済発展と市場化』名古屋大学出版会、1997年、加藤弘之・上原一慶編著『中国経済論』ミネルヴァ書房、2004年、南亮進・牧野文夫編著『中国経済入門：世界の工場から世界の市場へ』日本評論社、2005年、今井健一・渡辺真理子編著『企業の成長と金融制度』（『シリーズ現代中国経済４』）名古屋大学出版会、2006年、等。

際的な歴史関係などの面について丁寧に分析を行うことである。その成果として『20世紀の中国化学工業：永利化学・天原電化とその時代』[29]などが公刊された。このような研究方法は中国ではまだ少ない。

以上、簡単ながら中国の経済史の研究現状と課題を紹介してきた。文末に、特に強調したいのは、中国の経済史研究は、スタートした時点から日本の影響を受け続けていることである。

中国経済史研究の創始者である梁啓超は日本と深い関係を持っていた。研究によれば、彼が中国経済史研究を始めたのは1897年緒方南溟の著作『中国工芸商業考』を読んで感激を受けたからである。また、1906年に中国の広智書局によって翻訳出版された日本の学者織田一の『中国商務志』の影響を受けて、中国学者陳家錕は類似の研究を展開し、1908年『中国商業史』を世に送り出した[30]。

そのほか、郭沫若と九州大学との関係、傅衣凌と東洋文庫との関係などがよく知られている。このように考えると、中日経済史研究の交流はすでに約百年の歴史を持っているといえるであろう。

中国の学者は日本の学者から学ぶものがたくさんある。中国の学者は資料や実際の体験などをもっているという有利な条件を持っている。中日両国の経済史研究はそれぞれの特徴と長所を有しているので、お互いに学びあい、交流を深めていけば、お互いの学術事業の進歩を大きく促進することができると信じている。

百年の交流の歴史を大切にし、今後の研究活動において協力を深め、共に発展していくことが、一人の中国経済史研究者としての私の切実な願いである。

付記：本稿は九州大学経済学部リサーチワークショップにおける講演をもとに文章化したものである。

李　暁〔中国政法大学商学院　教授〕
張　暁紅〔九州大学大学院経済学研究院　助教〕

29）田島俊雄編著『20世紀の中国化学工業：永利化学・天原電化とその時代』東京大学社会科学研究所、2005年。
30）楊祖義「中国経済史学萌芽的分析与探討」聊城大学『聊城大学学報』2004年第5期。